

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：12611

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21730666

研究課題名（和文） 受験(準備)の低年齢化に対する教育社会学的研究

研究課題名（英文） Research of Educational Sociology on the Lowing Trend in the Ages of Children for School Admission Competition (and Preparation to it)

研究代表者

望月 由起 (MOCHIZUKI YUKI)

お茶の水女子大学・学生支援センター・准教授

研究者番号：50377115

研究成果の概要（和文）：

本研究では、現代の日本の小学校受験（お受験）が、ペアレントクラシーによる教育選抜にほかならないことを明らかにした。メリトクラティックな社会観をもつ「教育する家族」が小学校受験（や早期からの中学受験準備）に積極的に参入する現状を実証的かつ具体的に示し、早期選抜問題としての小学校受験や中学受験の「実態」に、真摯に目を向けていくことの必要性を提言した。

研究成果の概要（英文）：

This study clarified that elementary school entrance examinations (Ojuken) in today's Japan is nothing other than the educational selection under parentocracy. By positively and specifically depicting the reality of “educational families” with a meritocratic view of society vigorously engaging themselves in the elementary school admission competition (and early preparation for junior high school entrance examinations), this study proposed the importance of seriously addressing the “reality” of competitive practices taking place at elementary and junior high school entrance examinations as one of the problems concerning the early screening.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：早期選抜問題・小学校受験・ペアレントクラシー・家庭の教育戦略・国私立小学校・学習行動・中学受験準備

1. 研究開始当初の背景

子どもの安全、学力、情操、将来の進路など、わが子にできるだけ良い教育環境を与えたいというのは、多くの親の願いであろう。学力低下やゆれる教育改革を背景に、公立校への不信感が増す一方、私立中高一貫校の人気は高まっている。義務教育段階の受験はさらに低年齢化しており、少子化や景気低迷などを背景に沈静下していた小学校受験熱も再度過熱している。

Brown (訳書 2005) によれば、市場化された社会における教育的選抜は、本人の能力や努力といった「業績」よりも、親の富や願望といった「ペアレントクラシー」に基づくものへと変質する。耳塚(2007)は、「親の富(学校外教育費支出、世帯所得)と願望(学歴期待)が子どもの学力を規定しているという意味で、日本社会もまたペアレントクラシーへの道歩んでいると推測できる」と指摘している。小学校受験には、こうした側面が色濃くあらわれることが大いに予想される。小学校を受験し、進学するにあたり、親の富の大きさが問われることは言うまでもなく、また、幼い子どもを対象にした入学選抜では、親の願望や動機づけが大きな影響力をもつためである。

それぞれの学校の特色ある教育の享受とともに、受験競争の回避を第一義として、エリートや富裕層が子どもを私立小学校に進学させる状況は戦前からみられた。しかし、高等教育への進学が大衆化している現在、高等教育機関がもつ「威信のトップ・ダウン効果(小針 2000)」は、一部の難関私立大学の併設校を除き、もはや大きなものではないだろう。むしろ、親の富や願望を背景に、国公立大学を含めた難関大学やそこへの進学が期待される難関中高一貫校への進学準備と

して、「小学校受験・進学」という教育戦略をとる家庭も増えているのではなかろうか。望月(2008)は、エスカレーター型進学システムの第一歩としてその小学校に進学したとしても、その制度に依拠することなく、より難易度の高いとされる中高一貫校にむけた受験態勢をとるケースが、近年少なからずみられることを明らかにした。すなわち、私立小学校受験は、併設する特定大学に対するルートであるのみならず、国公立大学も含めた難関大学に対して有利なルートへの早期選抜となりうるものであり、その過熱や拡大は、家庭の経済的・地域的背景に基づく階層の二極分化を進める結果を招く可能性が示唆されたのである。

欧米では 1960 年代以降、早期選抜問題が階層間の不平等問題と関連して社会学的な研究対象や教育政策上の課題となっている。しかし日本では、マスコミなどの興味本位の批判・揶揄報道の多さに比べ、早期選抜としての小学校受験(いわゆる「お受験」)について学問的に明らかにしてきたとは言いがたい。現代の小学校受験の背景には、教育問題や家庭問題、社会問題にいたる深い問題が潜んでいる。この 10 年余の社会状況の変化の中で、教育の営みという文化領域はますます重要な位置を占めている。中でも、幼児教育から各学校段階、高等教育までの諸教育機関の今日的なあり方は、久富(2007)が指摘するように、そこでの算出(学習者たちの学力や進路などを含め)を通して、家族・地域間の格差の広がりを生産する働きをしている。

小学校受験を経験した子どもたちが、エスカレーター式に併設上級学校に進学するのみならず、外部中学受験をも志す可能性があるのであれば、彼らの小学校進学後の学習行

動は従来と異なることも予想される。私立小学校に進学した子どもたちは、親の富や願望を背景に、学力という業績を伴う形で、他の子どもたちとの間に将来の進路やキャリアの格差を増大させていく可能性も否めない。こうした傾向は、併設高校をもたない、あるいは必ずしも併設上級学校に進学できない国立小学校でも、同様に予想される。

こうした懸念を検証するためにも、国私立小学校に通う子どもたちの学習行動を明らかにする必要がある。それは結果として、「誰が、なぜ学力を獲得するのか」という教育社会学がこれまでも強く関心を向けてきた主題にもつながるだろう。

<参考文献>

Brown, Phillip, 1995, 'Cultural capital and social exclusions: some observations on recent trend in education, employment and the labor market', *Work, Employment and Society* 9, B.S.A. Publishment Ltd., Cambridge University Press (=2005, フィリップ・ブラウン「文化資源と社会的排除」A・Hハルゼー他編、住田正樹他編訳『教育社会学—第三のソリューション』九州大学出版会)

久富善之 2007「特集テーマ<「格差」に挑む>について」『教育社会学研究』第 80 集, pp5-6.

小針誠 2000「戦前期における私立小学校の存廃条件に関する歴史社会学的研究—私学一貫校としての制度化と併設初等教育機関の入・在学者数に着目して—」『教育学研究』第 67 巻第 4 号, pp54-65.

耳塚寛明 2007「小学校学力格差に挑む だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』第 80 集, pp23-39.

望月由起 2008「私立小学校の多様化—卒業後

の進路選択に着目して—」『日本教育社会学学会, 第 60 回大会発表要旨集録』pp240-241.

2. 研究の目的

本研究の目的は、国私立小学校への受験プロセスと進学後の学習行動に関して、教育社会学的な視点から捉え、「受験（準備）の低年齢化」の実態と課題を明らかにしていくことである。

先に記した「研究開始当初の背景」に基づき、本研究では、「受験（準備）の低年齢化」の実態と課題について、以下の分析課題を設け、実証的かつ具体的に明らかにすることとした。

第一の課題は、「なぜ子どもに小学校受験をさせるのか（国私立小学校進学目的）」を調査し、「小学校受験に潜む現代的な家庭の教育戦略」を捉えることである。

第二の課題は、「小学校受験をする家庭は、どのような意識で、どのような準備をし、どの程度の経済的・心理的負担であるのか」を調査し、そのイメージとの比較も行いながら、「小学校受験の実態」を明らかにすることである。

第三の課題は、「国私立小学校進学後の子どもたちの学習行動、特に中学受験に対する準備」を調査し、明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究では、先に「研究の目的」で述べた 3 つの分析課題を通して、「受験（準備）の低年齢化」の実態と課題を明らかにすべく、以下の調査を行った。

(1) 国私立小学校への進学目的および受験

プロセスに関する質問紙調査

・実施時期：2009 年 6 月中旬から 7 月中旬

（一部は 2010 年 1 月）。

・調査対象：2010 年度小学校受験をする（し

た) 年長児をもち、首都圏および関西圏に在住し、幼児教室に通学している(していた) 家庭 1,667 件。有効回答数 297 件(有効回答率 17.8%)。

・調査方法：首都圏および関西圏の幼児教室 5 校(10 教室)を通して、質問紙および返送用封筒を配布し、返送を求めた。

・主な調査項目：

- ・受験の検討・準備をはじめた時期や理由
- ・受験対策やサポートの具体例
- ・受験期の過ごし方
- ・受験校検討の基準や参考とした情報源
- ・受験に取り組むことによる家庭へ影響
- ・両親の学歴・職歴・職種
- ・家庭の経済状況 など

(2) 小学校受験対策を行う幼児教室の観察調査及び担当者へのインタビュー調査

・実施時期：2009 年 6 月から 8 月。

・調査対象：首都圏および関西圏の幼児教室 5 校(10 教室)。

・主な調査項目：

- ・観察調査…授業の様子、教室環境など
- ・インタビュー調査…調査(1)で掲げた調査項目などに関して、担当者からの意見など

(3) 小学校受験のイメージに関するインターネット調査

・実施時期：2009 年 10 月中旬。

・調査対象：2010 年度小学校受験の予定のない年長児をもち、首都圏および関西圏に在住する家庭 340 件。有効回答数 322 件(有効回答率 94.7%)。

・主な調査項目：

- ・子どもとの接し方・かかわり方
- ・子どもの教育・育児に対する考え
- ・子どもに希望する進路

- ・両親の就労状況・最終学歴・出身高校
- ・家庭の暮らし向き・世帯年収
- ・家庭に対する小学校受験の影響力
- ・小学校受験のイメージ など

(4) 国私立小学校の生徒の学習行動に関する縦断的な質問紙調査(1 年生時・2 年生時・3 年生時のパネル調査)

・実施時期：2010 年 4 月から 2013 年 3 月。

原則として、各年度の春期および秋期に実施。

・調査対象：調査(1)の調査協力者 297 名。

・調査方法：質問紙および返送用封筒を郵送し、返送を求めた。

・主な調査項目：

- ・実際に小学校に入学されてみての感想
- ・子どもの教育や将来に対する家庭の考え
- ・子どもの習い事(種類、曜日、月謝など)
- ・子どもの将来のキャリアデザイン
- ・入学した小学校の受検指導 など

4. 研究成果

本研究において、先の「研究の方法」にて挙げた調査などを通して得た主な成果は以下のとおりである。

(1) 小学校受験に取り組む家庭

これまで事例レベルで語られてきた「誰が」「なぜ」「どのように」といった小学校受験家庭の基本的な側面を実証的かつ具体的に明らかにした。

その結果、世帯年収 1,000 万円を超えるような「家庭の経済力」と、大学院や難関大学への進学を子どもに望むような「親の学(校)歴期待」をベースにしているという点で、現代の小学校受験、特に私立小学校受験がペアレントクラシーに基づく教育選抜にほかならないことを確認することができた。さらには、「公立小学校不信」「国私立小学校の環境・評価」「高学歴へのルート」といった理

由により、いわゆる「教育する家族」が、母親の就労を伴うケースも含め、「教育熱心な親」という道徳的理想にかなうものとして、幼児教室を利用しながら、小学校受験に積極的に参入している様相も明らかにした。

(2) 小学校受験の影響に対する認識

小学校受験の影響に対する、一般的なイメージと実際に小学校受験に取り組む家庭の認識との相違も明らかにした。

例えば、一般的には、小学校受験は子どもの成長や発達に悪影響を及ぼすといったイメージが強いのに対し、小学校受験家庭では、家族や子ども本人に対して、むしろ好影響を及ぼしているとの認識をもっていることを明らかにした。また、一般的には、小学校受験は「親の自己満足」とイメージする傾向があるのに対し、小学校受験家庭では、むしろ「親の精神的な負担」と感じていることも示した。

(3) 小学校受験に取り組む家庭の教育観・進路観・社会観

小学校受験という可視的な取り組みの背後にある、受験家庭の教育観・進路観・社会観についても、小学校受験をしない家庭との比較を通して明らかにした。

例えば、小学校受験家庭には、「子どもの教育環境全般に対して関心が高く、それを意図的に整えようとしている」「子どもへの学歴期待が明確であり、かつ高い学（校）歴を期待している」家庭が多いことを明らかにした。また、「受験競争や格差に肯定的であり、今後も受験競争は激化すると考えている」家庭が小学校受験家庭には多いことも示した。その上で、こうした教育観・進路観の背景には、「現代の日本社会は、学（校）歴を重んじ、個人の努力はむくわれる社会である」と

いったメリトクラティックな社会観があることを指摘した。

これらの成果は、日本ではこれまで学問的に看過してきた「早期選抜としての小学校受験」や「国私立小学校に通う子どもたちの学習行動」を明らかにするとともに、現代的な課題である「義務教育段階に向けられた家庭戦略の階層間格差」について検討する上で有意義なものと思われる。

なお本研究の成果の詳細は、日本教育学会・日本教育社会学会・日本こども社会学会にて発表をするとともに、キャリアデザイン学会「キャリアデザイン研究」にて研究論文として掲載されている。また、本研究の研究成果を図書としてまとめ、広く社会・国民に発信した。さらに調査協力者には、調査分析結果のフィードバックも繰り返し行った。

本研究の最終年度にあたる平成 24 年度には、本研究の知見をとおして浮かび上がった研究課題を明確にし、今後の研究計画にもあつた。それに基づき、科学研究費助成を新たに申請し、平成 25 年度以降も本研究を発展的に継続させることを可能とした（基盤研究 C「日本型早期選抜及びその準備教育にみられるペアレントクラシーに関する実証的研究」）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①望月由起、私立小学校受験家庭が描く子どものキャリアデザイン—受験理由および望む教育環境・学歴に着目して—、日本キャリアデザイン学会「キャリアデザイン研

究」第8号、2011、pp71-85、査読有

〔学会発表〕（計3件）

- ①望月由起、小学校受験家庭の教育観・社会観、日本教育社会学会、2010年9月18日、関西大学（大阪府）
- ②望月由起、小学校受験のイメージと実態－年長児をもつ家庭への調査をふまえて－、日本教育学会、2010年8月22日、広島大学（広島県）
- ③望月由起、都市部における小学校受験への取り組み－受験家庭に対する調査を通して－、日本子ども社会学会、2010年7月3日、京都女子大学（京都府）

〔図書〕（計1件）

- ①望月由起、学術出版会、現代日本の私立小学校受験－ペアレントクラシーによる教育選抜の現状－、2011、230頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

望月 由起 (MOCHIZUKI YUKI)
お茶の水女子大学・学生支援センター・
准教授
研究者番号：50377115

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし